

## 身体運動を教える言葉

— M・ポランニーの意味論から見たその限界と換喩的理解 —

岩井哲雄

### はじめに

身体技能を言葉で表現する困難さは、誰もが経験したことのあるものにちがいない。確かに、身体運動は、言葉に依らずとも、見よう見まねで身につけることもできる。しかし、なかには、このような成り行きまかせの仕方では身につけることのできないような、高度な技能も存在するように思われる。このような場合には、我々は、やはり言葉を用いざるを得ないし、しかもその効果を直観しつつ言葉を用いているにちがいない。では、こうした場合に用いられる言葉にはどのような特殊性があるのだろうか。そして、そうした言葉と身体運動とはどのように媒介されるのであろうか。これが本稿の主題である。

この問題の考察を、本稿では、哲学者オイゲン・ヘリゲル (Eugen Herrigel) の著書『弓と禅』(1951) に記録されている阿波研造の言葉を通して行ないたい。阿波研造は、ヘリゲルに弓道を教えた人物であり、禅の影響を強く受けている。そのために彼は、言葉の限界をよく認識しており、必要以上に饒舌に語ることもない。しかし、阿波の言葉は、ヘリゲルにとっては「おぼろげに感得する (ahnen) だけで十分」(Herrigel, 1951: 44-45) なものであったのであり、ここから彼の言葉の的確さはうかがい知れるであろう。

では、阿波研造の言葉遣いとはどのようなものだったのだろうか。上述の著書でヘリゲルは、阿波は彼に何かを伝えようとするとき、いつも「簡単な暗示 (kurzen Andeutungen) を与えるだけでこと足れりとした」(Herrigel, *ibid.*: 44)、と述べている。例えば、弓道では、弓を引いた状態から、矢を放つことを「放れ」と呼ぶが、阿波はその際に意図的に矢を放してはならないと言う。そして阿波は、「『それ』が射る (Es'schießt)」「射が落ちる (der Schuß fällt)」という言い回しによって、この意図的ではない「放れ」を表現している (Herrigel, *ibid.*: 60, 65)。

こうした阿波の言葉は、身体運動を教える表現の特殊性を示している。しかし、なぜ阿

波は、他にもなくこのような曖昧な表現を用いるのだろうか。容易に思いつく答えは、阿波は表現し難い事柄を述べるために隠喩を用いたのだ、というものであろう。確かに「射が落ちる」という表現は隠喩に見える。しかし、『それ』が射る」という表現は、はたして隠喩なのだろうか。この一事からして、阿波の言葉遣いを隠喩という視点から考察するだけでは、不十分であるように思われる。

隠喩重視の傾向には理由がある。かつてソシュール (Ferdinand de Saussure) は、連合と統合という言葉の二つの秩序を提起し、ヤコブソン (Roman Jakobson) はこの二つの秩序 (ヤコブソンの用語では、相似性と近接性) を、それぞれ隠喩と換喩の論理として解釈しなおしている (ヤコブソン、1973:26)。ところで、そもそもソシュールにとって、連合と統合は「われわれの精神活動の二つの形式に対応」(ソシュール、1972:172) するものであり、したがって、この二つのいずれがより重要だということはなかったはずである。しかし現実には、換喩の重要性は、隠喩の重要性ほどには十分に理解されていない。ヤコブソンは、この理由を次のように解している。

「意味の相似性は、参照される言語の象徴とメタ言語の象徴とを結合する。相似性は隠喩的表現を、それがとって代わる表現と結びつける。それゆえ、譬喩を解釈するためのメタ言語を組み立てるとき、研究者は隠喩を扱うためにはより等質的な手段をもつわけであるが、換喩は違った原理に基づいており、解釈を容易には近づけないゆえに、隠喩に関する豊富な文献に匹敵するようなものは、換喩の理論については一つも挙げるできない」(ヤコブソン、1973:44)<sup>(1)</sup>。

こうした隠喩重視の現状に対して、本稿は、換喩という視点から前述の問題を考察する。なぜなら、仮に隠喩の論理と換喩の論理という二つの論理が存在するとすれば、身体運動の獲得の論理は、隠喩の論理よりも換喩の論理に近縁だと考えるのが自然だからである。というのも、本論で明らかにするように、動物も技能的な運動を獲得するが、隠喩を理解することはできないからである。しかし、動物にも換喩ならば理解し得る。したがって、単に身体運動の表現の特殊性だけでなく、その表現と身体運動との媒介の問題をも視野に入れるならば、換喩という視点から問題へアプローチするのが妥当であろう。すなわち本稿は、身体技能の達成は換喩的な過程であるとの予想の下に、身体運動の言語表現の特殊性と、その表現と身体運動との媒介の問題を考察するものである。

本稿では前述の仮説に従って、身体運動という基盤の上では隠喩が不可能だということ、むしろここで可能なのは換喩であることを示す。そのための枠組みとして、本稿ではポラ

ンニー (Michael Polanyi) の暗黙知の理論に依拠することにする。というのも、この理論は身体運動の理論と解することができるからである。以下ではまず、ポランニーの2つの「意味の現われ」の区別を論じ、これを受けて身体運動の特質を規定する (I)。次に、隠喩それ自体の成立条件を調べ、身体運動の領域がこの条件を満たしていないこと、したがって、身体運動を表現するいかなる言葉も隠喩としては理解され得ないということを示す (II)。次に、身体運動の領域でも、換喩の論理ならば成立可能であることを明らかにし、さらに身体運動の獲得が換喩の論理に基づくことを、暗黙知の理論に依拠しながら論証する (III)。そして、以上で論じた枠組みによって、阿波の言葉遣いがどの程度まで説明可能であるかを見ることにする (IV)。最後に、身体運動についての本稿の議論が、教授一般にどのような関わりをもつかを予想として述べることにしよう (V)。

## I 存在の意味と表示の意味

### (1) 存在の意味と表示の意味

ポランニーによると、あらゆる知識は暗黙の力 (tacit power) によって統合 (integrate) される脈絡 (context) のなかにある。そもそも、知ること (knowing) とは、手掛かり (clue) となる諸細目 (particulars) を一つの意味ある脈絡へと統合することによって、一つの全体 (a whole) としての調和的な存在 (the coherent entity) ないし包括的存在 (comprehensive entity) を形成することだからである<sup>(2)</sup>。

例えばハンマーを使うとき、人は、ハンマーやそれが掌に与える振動などの諸細目を従属的に感知する (subsidiarily aware) ことによって手掛かりとなし、それらを、釘を打ち込むという目的に調和するように統合する。そして、この統合によって、釘を打ち込む技能という包括的存在が成立する。このとき、彼は、この包括的存在の中に諸細目を溶け込ませ (merge)、それを一つの全体として焦点的に感知する (focally aware) ののである。

ところで統合を行なうとき、人はこの統合を可能とする手掛かりを探し出さなければならない。このとき彼は、「その手掛かりが従属的な諸細目として意味を持つような脈絡を示唆するように思われるような」、そういう手掛かりを探り出す (Polanyi, 1974: 101)。つまり、この統合は脈絡感 (sense of the context) に導かれて行なわれる。それゆえ包括的存在は、包括的脈絡 (comprehensive context) でもある。こうして、いかなる知識も意味のある脈絡の中にあることになる。

さて、ポランニーは、意味 (meaning) の現われを二つのケースに分ける。一つは、単

語のように、「あるものが他のものを意味する」場合であり、もう一つは、人相や旋律やパターンのように、「それ自体としてのみ何かを意味する」(Polanyi, *ibid.*: 58) 場合である。上述の脈絡という概念を用いれば、この意味の二つの現われを、さらに厳密に規定することができる。

まず、「あるものが他のものを意味する」ケースから見ることにしよう。「脈絡の中で効果的に機能するものは何であれ、その脈絡の中で意味を持つ」っている (Polanyi, *ibid.*: 58)。例えば、「脈絡の要素——ハンマー、探り針、話された語——はみな自らを越えて指し示し (point)、そしてこの脈絡の中で意味を付与される」(Polanyi, *ibid.*: 65)。この種の「意味」は、一般に「表出的 (representative) 意味」と呼ばれる。しかし、ハンマーや探り針がもつ意味と、語のもつ意味は、厳密には同じではない。ハンマーや探り針は異なる脈絡に置かれると、以前の脈絡の場合とは異なる意味をもつものに対して、語は異なる脈絡で用いられても (少なくとも理念的には) 同一の意味を保つ。そこでポランニーはこの二つを区別し、表出的意味のなかでも、「事物や活動の固定的脈絡には内在しない」(Polanyi, *ibid.*: 91) 意味を、特に、「表示的 (denotative) 意味」(Polanyi, *ibid.*: 58) と呼ぶ。語がもつ意味は、脈絡を離れた理念的な意味である。これに対して、ハンマーや探り針の意味は、単に表出的であって、表示の意味ではない。

次に、「それ自体として何かを意味する」ケースを見てみよう。この場合、人相を例に考えればよく分かるように、脈絡の要素が表示の意味や表出的意味をもつとは違って、「脈絡それ自体が意味を持つものとして感得される」(Polanyi, *ibid.*: 58)。この、「脈絡それ自体が保有するような種類の意味」は「存在的 (existential) 意味」と呼ばれる (Polanyi, *ibid.*: 58)。ポランニーによれば、例えばダンスや数学や音楽などが存在的意味を持っている (Polanyi, *ibid.*: 65)。

このように、言葉が表示の意味をもつものに対して、数学や音楽やダンスは存在的意味をもつ。また、数学や音楽やダンスの要素、つまり個々の数式や音符や身体運動は、異なる脈絡に置かれるときは異なる意味をもつであろうから、表示的ではない表出的意味をもつと言ってよいだろう。身体運動が表示の意味をもつのは、例えば手話のような場合であり、身体運動の通常の在り方からすれば極めて異例なケースであると言える。

以上のように、ポランニーによれば、存在的、表出的、表示的という三種の意味が存在する。しかしながら、存在的意味と、表示的ではない表出的意味とは截然と区別することができない。ポランニーは次のように言う。「動物は何ものかを表示し得る言語を持たな

いから、動物が理解し得るような類の意味は総て存在的だと記述してよかろう。記号の学習は、表示への第一歩であるから、従ってこれは存在的意味の一つの特殊ケースに過ぎないことになろう」(Polanyi, *ibid.*: 90-91)。ポランニーがここで言及している記号の学習とは、記号による動物の条件づけである。この場合、記号は脈絡を離れて意味の同一性を保てないから、その意味は単に表出的である。それと同時に、動物に理解できる意味は存在的意味だけであるから、この記号の意味は存在的でもある。

上記のようなケースは、単なる表出的意味が脈絡から切り離せない以上、それを脈絡全体の存在的意味と切り離すこともできないのだ、と解釈できる。そして動物の場合に限らず、表出的意味は、それが表示的でない場合は、一般に存在的意味から切り離すことができないと言うことができるだろう。したがって以下では、区別の必要な場合以外は存在的意味と表示的でない表出的意味とを一括して存在的意味と呼び、これを表示的意味と対置させることにする。

さて、ここで構文論、意味論、語用論という三つの次元の区別を用いて、上述の議論を整理することにしよう。モリスは、「記号どうしの形式的な関係」を「記号過程の構文論的次元」、「記号と記号を適用できる対象 (object) との間の諸関係」を「記号過程の意味論的次元」、「記号と解釈者との間の関係」を「記号過程の語用論的次元」と定義する (Morris, 1938: 6-7)。この三つの区別をポランニーの「意味」の区別へ結びつけるには、幾らか補足が必要であろう。

第一に、モリスのいう構文論的次元は、論理的構文論のみを意味しているのではない。モリスは、従来の論理的構文論では扱われてこなかった「命令」や「詩」、「知覚記号、美的記号、記号の実際のな使用」などにも構文論的問題があり、これらも「広義の構文論」によって扱われなければならないと言う (Morris, *ibid.*: 16)。モリスのいう構文論とは、この広義の構文論に他ならない。

第二に、モリスは、意味論的規則 (semantical rules) をもつ記号は意味論的次元を持つと考えている (Morris, *ibid.*: 24)。意味論的規則によって、記号は対象を現示 (denote) する。しかし、意味論的規則それ自体は、「指示 (designation) の条件を述べておりしたがって指示対象 (designatum) を規定する」(Morris, *ibid.*: 23) のものである。ところで、モリスのいう「指示対象」とは、脈絡と伴に与えられる実在物、すなわち「現示対象 (denotatum)」ではなく、「ものの類 (a kind of object) ないしクラス (class of objects)」を意味する (Morris, *ibid.*: 5)。したがって論理学の言葉で言い替えれば、意

意味論的規則とは外延を指定するもの、すなわち内包に相当すると考えてよい<sup>(3)</sup>。そして、意味論的規則は、脈絡に還元することのできない外延を指定しているものであるから、これは脈絡に内在しない自立的な規則ということになるだろう。

さて以上の予備的考察をふまえて、ポランニーの意味の区別を次のように整理することができる。すなわち、ポランニーのいう存在的意思（および、単なる表出的意味）は、構文論と語用論の次元に生じる意味と特徴づけることができる。まず、存在的意思が成立するには、暗黙の力による諸細目の統合が存在すれば十分であり、そのような統合は統辞法の一つと見なすことができる<sup>(4)</sup>。それゆえ、モリスのいう広義の構文論に、存在的意思を成立させる暗黙の統合を含めてもよいだろう。そしてまた、構文論上の存在に過ぎない統辞法も、実際に使用される場合には、必然的に語用論的次元に足を踏み出すことになる。したがって存在的意思は、構文論と語用論の次元をもつといえるだろう<sup>(5)</sup>。例えば、音楽のもつ意味は存在的意思であるが、音楽には構文論と語用論との二つの次元のみを認めることができる。ここでは、楽譜と演奏がそれぞれ構文論と語用論の次元に相当し、かつ意味論の次元はない。音楽によって表示的意思を伝達するのは不可能だからである。さらに数学を例にとろう。純粋数学では、公理や変形規則は構文論的次元に、数学者の思考や書き下された証明は語用論的次元に属している。意味論的次元は、数学の体系化の際に除去されている。

存在的意思が構文論と語用論の次元をもつものに対して、表示的意思は、意味論的次元をもつ意味として特徴づけることができる。まず、ポランニーのいう表示的意思とは、「固定的脈絡に内在しない」意味のことであった。つまり、それは脈絡に内在する実在物（モリスの言い方では「現示対象」）ではなく、脈絡から自立した理念的な意味として特徴づけられる。そして、このような理念的な意味が存在する以上、脈絡から自立した意味論的規則が存在しなければならない。ポランニーの場合、文の統合とは異なる、語の意味の統合がそのような規則に相当する。例えば、「人間一般について語る際、私たちはどんな種類の人間にも注目しておらず、様々な人間が合わさった意味に注目する」(Polanyi, 1969, 149)。このような語の意味の統合は、文の脈絡からは自立したものであり、したがってこれを意味論的規則の一つと見てよいであろう。こうして、表示的意思は、モリスのいう意味論的次元をもつと言うことができる<sup>(6)</sup>。逆に、存在的意思や単なる表出的意味は、脈絡を離れ得ない意味であり、脈絡の外部の何かと関係を持たないから、それは意味論的次元をもたないのである。

以上のように、存在的意味を分析するには、構文論と語用論の次元さえあれば十分である。これに対して、表示の意味は、構文論と語用論の次元における意味ではない。もちろん、厳密に言えば、表示の意味は脈絡の影響を受けるはずであって、その理念性は現実には揺らぐはずである。それゆえ、その分析には、構文論と語用論の次元に加えて意味論的次元が不可欠だということになる。

## (2) 身体運動のもつ意味

ポランニーは、数学や音楽同様、ダンスもまた存在的意味をもつと考えている。しかしむしろ、ダンスという特定の領域だけでなく、身体運動一般が、存在的意味だけをもつ構文論と語用論上の存在だと思われる。これを論証するために、まず、身体運動が表示の意味を持たないこと、すなわち意味論的次元を持たないことを示しておこう。

Iで見たように、表示の意味とは、脈絡に内在しない意味であった。例えば、「これは犬だ」という文において、「犬」という語は『犬』という表示の意味をもつ。確かに、「犬」は脈絡の中の実在的な犬を現示するが、『犬』は脈絡に内在しない。『犬』は実在的な犬よりも抽象的な何かである。

では、これと同様な事態を、身体運動の水準にも認めることができるだろうか。現に行なわれている具体的な運動があるでしょう。このとき、表示の意味をもち得る運動は、少なくとも脈絡から切り離し得る抽象的なものでなければならない。精神盲患者シュナイダーの症例は、「具体的運動」と「抽象的運動」とを区別しなければならないことを教えてくれる。シュナイダーは、目を閉じている場合には、実験者の命令に従って腕や脚を動かすことができない。また彼は、ドアが目の前にあっても、それが離れている場合、それをノックする真似ができない。つまり彼は、状況とは無関係な運動すなわち抽象的運動ができない。しかし彼は、実際的狀況に向けられた具体的運動ならば行なうことができる。例えば、ドアが手の届くところにある場合には、実際にそれをノックすることができる(メルロ＝ポンティ、1974：179-180)。このように、具体的運動が脈絡の中にある運動であるのに対して、抽象的運動は脈絡から切り離された運動であり、それによって運動は或る種の理念性を持つことができる<sup>(7)</sup>。

もちろん厳密に言えば、抽象的運動といえども、完全に脈絡から分離されているのではない。運動それ自体が脈絡を作るからである。したがって、運動それ自体の脈絡からも切り離された要素的な運動を、便宜的に「動作」と呼ぶとすれば、例えば抽象的運動のなかの〈曲げる〉、〈伸ばす〉などの動作こそが、表示の意味をもつかもしれない。

では、例えば身体の部位を〈曲げる〉運動は、「曲げる」という表示的意味をもつであろうか。しかし、これは表示的意味ではないと思われる。ある楽曲が「モーツァルトのピアノ協奏曲 24 番」と呼ばれるとしても、その曲が「モーツァルトのピアノ協奏曲 24 番」ということを意味しているわけではない。同様に、ある動作を「曲げる」と呼ぶとしても、その動作が「曲げる」ということを意味するわけではない。

動作が表示的意味をもたないことは、次のようにして示すことができよう。一般に、記号が表示的意味をもつならば、それはクラスを指示ないし表示する。それゆえ、記号がクラスを表示しないならば、それは表示的意味をもたない。したがって、動作がクラスを表示しないなら、それは表示的意味をもたないと結論することができる。ジェスチャー・ゲームの動作は抽象的運動の一つだと言えるが、このゲームは、抽象的な身体運動が何も表示していない、ということをよく示している。ジェスチャーは何も表示しないために、一つの動作が様々な誤った推論を呼び起こし、この当て推量がゲームとして成立するのである。このように、特定の動作が何も表示しないことは、動作および運動が表示的意味をもっていないことを示している。

他方では、確かに何かを表示する動作も存在する。例えば、お辞儀の動作や首を縦に振る動作は、「こんにちは」や「はい」という意味を表示していると言えるかもしれない。さらに、この種の意味に基づいて、軽蔑する相手に対して最敬礼しつつ皮肉を表すこともできるかもしれない。しかし、この種の動作は動作一般からすれば特殊なものである。それゆえ、一般に身体運動は表示的意味をもたないということは可能であろう。

では、身体運動は統辞法をもっているだろうか。野村雅一は、「機械的な動作の連鎖は、統辞法のみをもった連鎖」(野村、1983:30)であると言う。この主張を妥当性を確かめるには、身体運動のなかに要素的な動作の一定の結合パターンが存在すると予想できれば十分である。そして、この予想は、言語学で用いられる代換テスト(バルト、1971:165 参照)を、身体運動に施すことによって確かめられるだろう。実際、ノブを右に回してからドアを押すことと、左に回してからドアを押すことが異なるように、運動は代換テストを受け容れる。また、ノブを回してからドアを押すことと、ドアを押してからノブを回すことが異なるように、各動作の配列には一定の規則がある。こうしたことから、身体運動の領域にも統辞法が存在すると言うことは根拠をもつだろう。つまり、身体運動は、構文論の次元にあるということになる。そして、運動が実際に行なわれる以上、それは語用論の次元ももつであろう。

以上の議論によって、身体運動は表示の意味はもたないが、統辞法とその実際的な使用によって生じる存在的意味をもつと結論できる。さらには、身体運動の創造は統辞法を基礎としている、という予想も立つだろう。この結論はまた、身体運動は、その意味に関して数学や音楽と同列だということを意味する。これは、少々奇異に聞こえるかもしれない。なぜなら、身体運動のような自然なものとは、数学のような人工言語とは、最もかけ離れたものだと普通は考えられるからである。しかし、人工言語と身体動作はともに統辞法とその使用のみをもつという点で同等である。むしろ自然言語だけが、意味論の次元を持つ特殊な存在なのである。

## II 表示の意味と隠喩

I でみたように、構文論と語用論の次元においても、存在的意味というある種の意味が生み出される。では、この二つの次元の中で隠喩を構成することは可能だろうか。

構文論的次元での隠喩の不可能性は、次のように示し得る。そもそも統辞法は、文法上、適格な文と不適格な文とを区別するための規則である。ところが、すべての隠喩は文法的に適格である。それゆえ、統辞法は、通常の適格な文と隠喩とを区別しえない。例えば、「人間は狼だ」は文法的に適格であるから、統辞法はこの文を異例だとは認め得ないし、したがってまた隠喩だと認める根拠も与えないであろう。

次いで、隠喩は意味論と語用論の次元において生じるということを以下に示そう。

隠喩は、文法的には適格な文である。それゆえ、文法的に適格な文のなかには、字義的表現と隠喩とが混ざり合っていることになる。実際、字義的表現と隠喩とは、同じ平面にあって連続しているように見える。例えば、佐藤信夫は次のように言う。「言語一般に関しては、隠喩はむしろおだやかなものであり、あまり意外性のないもの」(佐藤、1992: 123) であって、むしろ「ステレオタイプ化する素質を持たない隠喩は理解されえないし、通用しない」(佐藤、同書: 125)。実際、「椅子の脚」の「脚」や「目蓋」の「蓋」が、隠喩であるか字義的表現であるかということは、ほとんど隠喩の定義次第である。それゆえ、隠喩と字義的表現とは連続していると考えらるべきであろう。だからこそ、隠喩と字義的表現との境界を定めるための規則が要請されることになる。

この境界の設定のためには、まず文法的に適格な文のなかで、字義通りの文とそうでない文とを区別しなければならない。この区別を行なうのは、字義通りの文を選別する規則に他ならないのであるから、この規則は意味論的規則だと言うことができよう。そして、

語彙の選択制限の規則は、このような規則の一例だと考えることができる。この選択制限の規則によって、字義通りの文は適格なものとして選別される。

逆に、選択制限違反という判定方法によって、機械的に隠喩を区別することも可能であるように思われる。例えば、山中桂一は次のように説明している。『「なまめかしい」という語は〈女性〉という範疇に属する語を選び、『渡る』という語はおそらく〈海原〉に類した語を目的語に選ぶ。そのために『なまめかしい楼閣』『夜を渡る』などの結合は、範疇の組替えとして隠喩を発生させるのである』（山中、1994：148-150）。

しかし、選択制限違反という隠喩の規準も難点がないわけではない。例えば菅野盾樹は、選択制限違反が隠喩の十分条件ではないことを次のような例を挙げて指摘している。菅野は、「あの男は狐だ」の代わりに、「あの男は *vulpes vulupes* だ」と言ったらこれは隠喩になりうるだろうかと問う（*vulpes vulupes* は狐の学名である）。そして、菅野の言うように、その可能性はまず皆無であろう。つまり、「あの男は *vulpes vulupes* だ」という選択制限を犯す文は、恐らく単にア・プリオリに偽の文と見なされるであろう。このように、選択制限違反という基準は、ア・プリオリに偽の文を排除するものではないのである（菅野、1985：106頁の注）。

さらに、選択制限違反は隠喩の必要条件でさえもない。意味論的規則によっても適格な隠喩が存在するのである。菅野が指摘しているように、「彼は危ない橋を渡った」は選択制限違反を犯していないにもかかわらず、隠喩でもあり得るような表現である。あるいは、人に向かって「この犬め」と言えば、これは恐らく隠喩であろうが、しかしこれは主語を欠いており、表面上は選択制限違反を犯してはいない。

しかし難点はこれだけでない。もし選択制限違反を隠喩の規準とするならば、隠喩と換喩の区別さえつかなくなるように思われる。例えば、泉鏡花『春昼』のなかの、「その穴のない天保銭が、当主でございます」（山中、1994：138）という換喩表現は、文脈から切り離された場合、隠喩とも換喩とも判断しかねるのではないだろうか。実際、この例文の「天保銭」と「当主」の結合は選択制限違反を犯しているが、しかしこの表現は隠喩ではない。つまり、選択制限違反は隠喩と換喩の区別を立てることすらできないのである。

以上の三つの難点は、選択制限という意味論的規則は単に字義的表現を選別する規則であって、隠喩を選別する規則ではないことを示している。これらの難点を除去して、隠喩を選別するには、さらに別の規準が導入されねばならない。それは、文脈という規準である。例えば、隠喩と換喩とを区別するには、現に与えられた脈絡（上記の例では、当該の

小説の文脈)が必要である。所与の文脈から切り離された場合には換喩は成り立たない。逆に言えば、所与の文脈から理解しうるものが換喩であり、そうでないものだけが隠喩として理解される余地をもつ。隠喩は所与の文脈とは無関係なのである<sup>(8)</sup>。

しかし、隠喩が所与の文脈と無関係だということは、隠喩の理解にとって所与の文脈が不要だということを意味するのではない。隠喩らしき表現が与えられたとき、我々は、それが所与の文脈とは無関係であることを確認するために、とりあえずその文脈を参照しなければならない。例えば、「危ない橋を渡る」という文は、橋が所与の文脈と何の関係もないことが確認されて初めて、隠喩として理解される可能性をもつ。また、「この犬め」という文も、所与の文脈との無関係さによって、初めて隠喩と見なされる余地をもつと言えよう。逆に、選択制限違反を明らかに犯している隠喩の例として挙げた「あの男は狐だ」という文も、適当な文脈、例えば、その男が演劇の中で狐を演じているという文脈が背景に存在すれば、隠喩とは見なされまいだろう。この文もまた、所与の文脈と無関係であるときに限り、隠喩と見なされ得るのである。

以上のように、隠喩の成立には、文脈という語用論的次元が必要であることがわかった。所与の文脈と関わりをもたない表現だけが、隠喩となる可能性をもつのである<sup>(9)</sup>。そして、ある表現が所与の文脈と関わりをもたないためには、それが所与の文脈から切り離し得ること、すなわちその表現が表示的意味をもっていることが必要である。つまり、意味論的次元にある表現であって初めて、隠喩の可能性をもつのである。したがって、隠喩の成立には意味論と語用論の次元が不可欠である、と結論できる。

さて、前節で見たように、身体運動は意味論的次元を持っていない。これは、本節の議論と合わせて考えれば、身体運動の領域では隠喩が不可能だということを意味する<sup>(10)</sup>。したがって、ここでは、仮に隠喩として提示された文も隠喩としては理解されず、隠喩とは別の解釈過程を踏まなければならないということになるだろう。

### III 存在の意味と換喩

IIでは、隠喩は、意味論的次元が存在しなければ成立し得ないことを明らかにした。本節では、換喩は、意味論的次元を欠いていても、構文論と語用論の次元さえ存在すれば成立し得ること、さらに、この両次元における創造は一般に換喩の構造をもっていることを明らかにしよう。

まず、換喩が構文論と語用論の次元で成立し得ることを示すには、意味論的次元をもた

ない生物の世界にも換喩の論理が見出されることを確認すればよい。そこで、菅野盾樹の議論を手掛かりに、換喩は生物の世界でも実際に存在することを確認しよう。

菅野は、知覚一般の特徴を「換喩的構成」(菅野、1995:39)として捉える。換喩的構成とは、「事象を形づくるおのおのの要素は他の要素や全体から、あたかも糊づけされた二つのものをまた別々にするような具合に、切り離すことができない」という構造、したがって「各要素は他の要素あるいは全体に結合されていて、ある意味で、前者はそのまま後者に匹敵する」(菅野、同書:40)、という構造である。そして、「換喩的構成は人間が事物を経験する方式であるばかりか、基本的には、あらゆる生体も、およそ経験をなそうるかぎり、これに従っている」(菅野、同書:42-43)という。

例えば、ミドリヒョウモンという蝶の雄は、交尾のために雌を探すとき、雌の「全部」を見届けるのではなく、雌の羽の特有の色彩に惹きつけられる。この色彩は雌という個体の「一部」でしかないが、交尾しようと雌を追いかける雄にとっては、一匹の蝶にそのまま匹敵する。羽の色彩とメスは『事実上の関係』にあり、それを基礎におこなわれる認知の方式は、人間同様に換喩的なのである(菅野、同書:42-43)。

さらに、動物の世界には、より高度な換喩的構成も存在している。例えば、カワウソが上流に流木を認めたならば、彼はその直撃を避けようとするだろう。それが可能であるのは、「ある距離に流木があるという知覚には、その木と自分との衝突の可能性がすでに折り込まれている」からである。このように、動物には、その知覚が捉える事物の「一部にすぎないものに、これから先展開されるはずの性状と行動までも含めた全部を見てとる」ことさえ可能なのである(菅野、同書:43-46)<sup>(11)</sup>。

このように、換喩的構成は、生物の世界に広汎に見ることができる。では、この換喩の論理によって、創造という事態を説明することは可能であろうか。この問題に答えるにあたっては、ふたたびポランニーの暗黙知の理論を参照することが有益であろう。この理論は、換喩の論理と解され得ると同時に、創造の理論でもあるからである。

まず、暗黙知の働きは実際に換喩的だと見なし得るであろうか。ポランニーによれば、人間による技能の理解は、動物によるそれと連続的である。すなわち、「ある技能——それが筋肉的なものであれ知能的なものであれ——を我が物とすることによって、われわれは、言葉では表現できない、そして動物の非分画的な能力と連続的な、ある理解を達成する」(Polanyi, 1974: 90)<sup>(12)</sup>。そこで、人間と動物の技能の理解が連続的であり、なおかつ動物に可能な理解は換喩的である他ないとすれば、理解一般を支える暗黙知の働きは、第

一義的には換喩的だと考えねばならない。

理論的にみても、換喩はただ一つの脈絡の中で成立し得るが、暗黙知による統合は一つの脈絡をつくるから、この統合は換喩の成立条件を満たすことができる。そして、この統合のなかで、諸細目が他の細目や脈絡全体に結びついている仕方は、明らかに換喩的な構造をもつ。つまり、暗黙知による統合のなかで、諸細目の表出的意味は、換喩として、隣接する他の細目や包括的全体を指し示していると解することができる。

例えば、ポランニーの挙げる記号学習を換喩の図式で理解すると次のようになる。パブロフの条件反射の実験において、記号は、脈絡を離れて一つの意味をもっているのではない。つまり、ベルの音は「餌」という表示の意味をもつのではない。そして、この記号が脈絡を離れて意味をもち得ないということは、その記号が隣接性に基づいていることを示している。つまり、イヌにとってベルの音が表出しているのは、それに隣接するもの(=餌)であり、ベルは換喩として餌を指し示しているのだと考えることができる。このように、表示的ではない表出的意味が現われるケースでは、記号(=脈絡の要素)を脈絡から切り離すことができない。そして、この事実が、表出的意味がまさに換喩的であることを示していると言える。

では、暗黙知による達成すなわち創造は、換喩的であろうか。ポランニーは、暗黙知による達成は「解への接近への感覚」に導かれて生じると言う。彼は達成と記憶の再生を同種の事態と考え、この感覚を度忘れした名前を思い出す過程を例に挙げて説明している。すなわち、「失われた言葉にますます近付いていくという感覚は興奮を起こすもので、これを我々は『たった今思い出すよ』とか、たぶんその後では『喉から出かかっているんだ』とか言うことによって確信をもって表現することがある」(Polanyi, *ibid.*: 128-129)。ここに見られる感覚が「解への接近の感覚」である。そして換喩が隣接性に基づくものだとすれば、この接近の感覚は、暗黙知による達成が換喩的であることを示唆している。

記憶の再生を、それに伴う行為という角度からみれば、それが換喩の特徴を備えていることはより明確になる。例えば、漢字や楽曲を思い出そうとする際に、我々はどう振舞うだろうか。忘れた漢字を手を動かして思い出そうとする行為は、筆順という統辞法上の換喩を利用するために、糸口を探す行為に他ならない。楽曲は、その一節を実際に口ずさむことによって、さらにその先の節が思い出されるだろう。運動も、糸口となる最初の動作を始めれば、あとは自然に行なわれる<sup>(13)</sup>。これらの例で、最初の糸口は換喩的に次の要素(最終的には脈絡全体)を示しているのである。そして、「解への接近の感覚」は、こ

うした想起に伴う感覚に他ならないであろう。

ポランニーにおいては、想起とは脈絡全体が既知である場合であり、創造とは脈絡全体が未知な場合だと考えることができる。そして、いずれの場合も、脈絡の諸要素は、脈絡全体を完結させるように働く。そして、脈絡の完成は、その存在的意味が明らかになることを意味するから、脈絡の要素は換喩的に未知の存在的意味を指し示す、とすることができるだろう。これは、意味論的次元を介在させることなく、換喩の論理に従って創造が行なわれる、ということに他ならない。

#### IV 身体運動の表現の不可能性と可能性 — 阿波の言葉遣いをめぐって

「はじめに」で述べたように、「射が落ちる」という表現は隠喩に見える。しかし、「『それ』が射る」という表現は、隠喩とは思えない。この事実は、動作の表現を隠喩という方向からのみ説明することの不十分さを示している。この二つの表現は、ともに身体運動に関わっているという観点から統一的に理解されねばならないだろう。より具体的に言えば、この二つの表現は、身体運動は表示的意味を持たない、という観点から理解されねばならないのである。

##### (1) 身体運動の表現の不可能性 — 「『それ』が射る」

まず、「『それ』が射る」という表現の説明を試みてみよう。この苦肉の表現は、身体運動を言葉で表現する難しさを示しているように思われる。そしてこの困難は、ある種の失語症患者のもつ困難になぞらえることができるかもしれない。そのような失語症とは、相似性の障害による失語症である。この種の失語症では、本稿で、「意味論的次元を欠く（表示的意味がない）」と呼んだ状況と同じような事態が生じている。なぜなら、この種の失語症では、統辞的な結合が優勢になるために、脈絡から自立した語（つまり表示的意味）を用いることができないからである。まず、この予想を確かめる準備として、ソシュールの言語の二つの秩序、およびヤコブソンによる失語症の二つの類型について見ておこう。

ソシュールは言語のなかに、統合関係と連合関係という二つの秩序を認める。「統合 syntagme」とは、言語の要素が「言の連鎖の上に順繰りに配列される」ことによって現われる結合の関係である（ソシュール、1972:172）<sup>(14)</sup>。また、「話線のそとで、なんらか共通のものを示す語は、記憶のなかで連合し、かくしてそこに多種多様な関係の結ばれる語群ができあがる」。この関係が、「連合関係 (rapport associatif)」である（ソシュール、

同書：173)。

ソシュールの上記の議論を、ヤコブソンは失語症の分析に用いている。その分析によれば、正常に話す人間は、意味の相似性に従って語を連合関係から選択ないし代置し、これを隣接性に基づいて統合関係へと結合ないし結構しているという。これに対して、語句の使用上の「主たる欠如が選択と代置とにあり、結合と結構のほうは比較的安定している」ものが「相似性の異常」による失語症であり、逆に「主たる欠如が結合と結構とにあり、正常な選択と代置とが比較的保持されている」ものが「隣接性の異常」による失語症である（ヤコブソン、1973：28）。

さて、ヤコブソンによれば、相似性の異常による失語症には次のような特徴がある。すなわち、「文の主要な、[脈絡を] 従属させる作因、すなわち主語は、省かれる傾向がある」（ヤコブソン、同書：28、括弧内は引用者）。つまり、結合が優勢なため脈絡が主語に従わず、逆に主語が省略されるのである。また同じ理由から、特定の名詞の代わりに「非常に一般的な名詞、例えばフランス人の失語症患者のことばでは machine（なんとかいうやつ）、chose（もの）など」が好んで使われる（ヤコブソン、同書：29）。

また、この失語症では等式叙述、例えば「“bachelor とは unmarried man のことである”」という表現を使用することができない。なぜなら、この等式叙述の使用には、「“bachelor=unmarried man”という代置集合」の利用が前提となるが、この種の患者は代置の能力に欠損があるからである。そして、これはまた患者のメタ言語の喪失をも意味する（ヤコブソン、同書：30）。なぜなら上述の等式叙述は、「“われわれの用いるコードでは、《bachelor》という語と《unmarried man》という迂言法とは等価である”」という「メタ言語的命題」と等価だからである（ヤコブソン、同書：32）。

このメタ言語の喪失は、「“名付けの能力”の失語症的欠損」をも意味する。つまり、この種の患者は、指し示された物の名前を言うことができない。名付けることもまた、「“われわれの用いるコードでは、指し示された物の名は《pencil》である”」というメタ言語的命題の使用と等価だからである。（ヤコブソン、同書：32）

さて、阿波は「『それ』が射る」と言い、〈矢を射る者〉を名付けることが出来ない。彼は、「それ」が何であるのか説明できない（確かに、「それ」とは「仏陀」であると言うが、これは説明とは言えないだろう）。阿波の「名付けの能力」の停止と、「それ」という一般的な名詞の使用は、上述の相似性異常の失語症によく似ていると言える<sup>(15)</sup>。

しかし、もちろん阿波は失語症患者ではない。すると、阿波の言葉遣いの原因は、阿波

自身にではなく、名付けの対象である身体運動一般の特徴に求めることができるかもしれない。つまり、身体運動に言及する言語が必然的に失語症に類した事態を引き起こす、と考えることはできないだろうか。

説明とはメタ言語の使用である。したがって、身体運動を説明するにも、メタ言語を使用しなければならない。しかし、身体運動にはそもそも表示的意味がないために、それに等価な言語表現がありえない<sup>(16)</sup>。それゆえ等式叙述が成り立たず、それを記述するメタ言語も成立しない。単語に関する等式叙述が可能であるのは、それに表示的意味があり、この意味に関する連合関係が成立しているからである。これに対して、動作の各部分は、それぞれ一義的な固有の意味を持っていない。それゆえ、ここでは意味の連合関係は成立せず、動作の各部分の意味を説明することは初めから不可能だということになるのである。

## (2) 身体運動の表現の可能性 — 「射が落ちる」

次に、「射が落ちる」という表現について考えてみよう。直観的には、この表現は隠喩であるように見える。また、「『それ』が射る」という表現が説明になっていないのに対して、この表現は何かを説明しているように見える。この表現が隠喩であるか否かという問題については後述することとし、以下ではまず、この表現がいかなる意味で、射についての説明なのかを検討しよう。

ところで、上でみたように、説明とはメタ言語の使用であった。これを詳細に見れば、説明は、説明すべき対象や事態をメタ言語なかへ引用することに基づいていることがわかる。そこでまず、引用一般を考察しておくことが有益だろう。

引用には直接引用と間接引用がある。例えば、「彼は『三角形は三辺をもつ』と言った」という表現は直接引用であり、「彼は三角形は三辺をもつということを言った」という表現や、「彼は三角形は三つの直線によって境界づけられた図形であると言った」という表現は間接引用である。

グッドマン (Nelson Goodman) は、直接引用と間接引用を観察した結果、引用の必要条件を次のように規定している。すなわち、(a)引用されるものを指示 (refer) することと、(b)引用されるものを何らかの形で含むことである。より詳細に言えば、直接引用は、(a)引用されるものを名付けることによって指示し、(b)その写しを含んでいる。これに対して、間接引用は、(a)引用されるものを述語付けることによって指示し、(b)その言い替えを含むものである。(グッドマン、1987: 73)

ここで注意すべき点は、「写し」が構文論的同一性に基づくのに対して、「言い替え」は

意味論的關係、すなわち指示あるいは意味の同等性に依存しているということである（グッドマン、同書：74）<sup>(17)</sup>。つまり、記号AとA'の指示の仕方が同じであるとき、あるいはAとA'が同じ意味であるときにのみ、A'はAの言い替えである。そして間接引用はこの意味論的關係が成立していない限り不可能なのである。

例えば、文字の直接引用は可能であるが、その間接引用は不可能である。例えば、「彼は『t』と書いた」という表現では、文字は直接引用されている。ここでは、tという対象が引用符によって指示され、かつtと『t』の間に構文論的同一性が確保されている。しかし、文字の間接引用は不可能である。なぜなら、「文字は指示も意味も欠いているので言い替えることができない」から、すなわち意味論的關係をもたないからである。

確かに、「アルファベットのティー」や「アルファベットの二十番目の文字」という表現によって、tを説明することはできる。しかしグッドマンは、これらの表現はtの言い替えではないと言う（グッドマン、同書：76）。この理由をグッドマンは明示していないが、これを推測すれば次のようになろう。例えば、「彼はアルファベットのティーということを書いた」という間接引用を含む表現を、直接引用を用いて書き改めてみると、それは、「彼は『t』と書いた」ではなく、「彼は『アルファベットのティー』と書いた」というものになろう。それゆえ、「アルファベットのティー」はtの意味ではないのである。

さて、説明とは、説明すべき事態Aを直接引用『A』によって指示し、その意味を間接引用A'によって表現するものである。つまり説明とは「『A』はA'である」という表現を構成することである（例えば、「『間柄』とは人と人との関係である」というように）。ここから分かるように、説明は意味による言い替えを含むから、間接引用が不可能であれば説明も不可能ということになるだろう。

すると、身体運動を説明する言語表現は、文字の引用と同じ困難を生じるだろう。動作は表示の意味をもたず、それ自体として何かを指示することも意味することもない。つまり動作においては、グッドマンのいう意味論的關係が成立していないのである。それゆえ身体運動を、言語内へ間接引用することはできないし、言語によって説明することもできないのである。この観点からすれば、「“それ”が射る」という表現は、間接引用の失敗だと言える。しかし、「射が落ちる」という表現は、必ずしも説明の失敗には見えない。では、これはいかなる説明なのだろうか。

文字が表示の意味を欠いているからといって、いかなる仕方でもそれを説明することができないということにはならない。間接引用が不可能である場合も、文字tの説明は次の

ような仕方によって可能である。つまり、上で見たように、tを「アルファベットの二十番目の文字」と表現するのである。しかしここで、t=「アルファベットの二十番目の文字」という定義は、意味上の言い替えではなく、事実上の隣接性に基づく定義であることに注意しよう。これは、味覚上の「甘い」ということを「砂糖の味」によって説明する場合と同様である。このようにして、意味や指示を欠く事態も、隣接性に基づいて説明することは可能なのである。したがって、「射が落ちる」は隣接性に基づく説明以外ではありえないだろう<sup>(18)</sup>。

同様に、意味を欠く身体運動を換喩によって表現することは珍しいことではない。例えば、道順を教えるときがそうである。ここでも、身体運動それ自体は意味を欠いている。このとき、最も普通の教え方は、例えば、「まっすぐ進み、最初の交差点を右に行く」というものである。ここで、「交差点」という語は意味をもつが、身体運動自体には関係ない。それは、運動に対して隣接関係にあるものによる表現であり、換喩的である。

しかしながら、隣接性は「経験してからでないと理解できない」。t=「アルファベットの二十番目の文字」という説明を理解するには、予めアルファベットを知っていなければならない。「甘い」も、砂糖を舐めたことがなければ理解できない。道順の換喩的表現も、交差点が何であるかを知らなければ理解できない。それゆえ、阿波は、正しい射は「経験してからでないと理解のできないこと」(ヘリゲル、1982:34)と言う他なかったのだと思われる。

このように、「射が落ちる」という表現は隣接性に基づくことによって言語表現として成立するしかない。では、なぜそれは隣接性に基づくにも関わらず、隠喩に見えるのか。「射が落ちる」という表現は、それを理解するための事実的な経験を欠く場合、所与の脈絡では理解できないことになる。そしてIIでみたように、所与の脈絡内では理解不能な表現は、ア・プリオリに偽と見なされない限り、隠喩と見なされるのである。例えば、「エルサルバドルを第二のヴェトナムにしてはならない」という表現は換喩の一例であるが、ヴェトナムで戦争が行なわれた事実を知らない限り、これを隠喩と解しても仕方がないであろう<sup>(19)</sup>。つまり、エルサルバドルとヴェトナムとの間にあたかも類似性があるように見えるのである。しかし、この表現が示す類似性、あるいは「射が落ちる」という表現における「射」と「落ちるもの」との類似性は、どう説明すべきだろうか。

類似性は、時に隣接性と等価である。例えば魚は、本物そっくりの擬似餌に騙される。では魚は、それが本物の餌に類似するから食い付くのだろうか。魚は本物の餌と判断した

ものを食べるのであり、何であれ餌に類似したものを食べるのではない。それゆえ、魚は擬似餌を本物だと断定しているはずであり、その類似性を認識しているのではないはずである。

魚による餌の認識はむしろ換喩的である。もし、魚が餌の特徴を完全に捉えるのであれば、擬似餌を本物の餌と間違えることは有り得ない。それゆえ、もし魚が擬似餌を本物の餌と間違えるのであれば、それは、魚は擬似餌を部分的にのみ認識していることを意味する。つまり、魚は餌の部分の認識によって餌の完全な認識に代えている、すなわち餌を換喩的に認識しているのである。

さて、ここでは隣接性の認識が類似性の認識と同等の結果をもたらしていることが理解されるだろう。人間は擬似餌のもつ類似性を認識し、魚は擬似餌のもつ隣接性を認識するのである。そして、この人間と魚との立場の違いが、「射が落ちる」という表現の、言語上の理解と動作上の理解との間にも現われると考えることができる。つまり「射が落ちる」という表現は、言語の領域では類似性を示唆し、動作の領域では隣接性を示唆するのである。

以上のように、「射が落ちる」という表現は隣接性によって成立するが、言語上は隠喩の性状を示すのである。しかし、この表現の類似性を知的に理解するだけでは、理解として十分でない。実際ヘリゲルは、別の機会に、「先生がこの比喻 (Vergleich) で遠回しに教えようとされることは、おそらく私にも分かるでしょう」と述べている (Herrigel, 1951: 40)。つまり、ヘリゲルは言語上の示唆を知的には理解できる。しかし彼にとって必要なのは、この示唆を身体的に理解すること、いわば体得することに他ならない。

そのためには、言語上の示唆は、身体運動上の示唆へ翻訳されねばならない。しかし、身体運動の領域では隠喩は不可能であるから、言語上の隠喩をそのまま運動の領域へ翻訳することはできない。それゆえ、言語上の隠喩は、身体運動の領域では別の論理、すなわち換喩の論理によって解釈され直さなければならないのである。だからこそヘリゲルは、これらの言葉を知的には「おぼろげに感得するだけで十分」だったのである。

## V おわりに

本稿で扱った問題は、身体運動を教える表現にはいかなる特殊性があるのか、そしてそうした表現と身体運動との媒介はいかなる場合に可能となるか、ということであった。そして、その結論は、そのような表現は隣接性に基づくものであり、その限りにおいて身体

動作との媒介が可能となるということであった。このような事態は、身体運動が表示的意味をもたず、存在的意味だけをもっていることに起因する。つまり、存在的意味の伝達は、換喩的にのみ可能なのである。しかしまた、この存在的意味の言語表現を知的に理解する限り、それは隠喩の性状を示さざるを得ないのである。

では、このことは、どの程度まで一般的に妥当するだろうか。例えば、音楽や数学もまた存在的意味のみをもつのであるから、身体運動に関して述べたことは、これらの領域においても妥当するだろう。では、存在的意味も表示的意味もともに成立しているような、より一般的な領域ではどうだろうか。

例えば、自然科学や社会科学は、この種の領域であろう。これらの領域では、表示的意味を頼りに、説明によって教えることが可能である。ところで、ヤコブソンやバルトが示唆していたように、メタ言語と隠喩には近縁性がある。というのも、メタ言語も隠喩もともに、表示的意味があって初めて成立するからである。それゆえ、メタ言語による説明が可能な領域では、隠喩によって教えることもまた可能だと思われる。特に、各領域に固有の存在的意味を言葉によって表現する場合には、この種の領域においても、その表現は隠喩とならざるを得ないであろう。さらに、この領域の表示的意味に通じていない学習者にとっては、単なるメタ言語による説明も隠喩に見えないとはいえない。なぜなら、学習者にとっては、当該の説明を理解するための文脈が通常十分には明らかではないからである。それゆえ、教えることは一般に、隠喩的だと予想できるかもしれない。

これに対して、IIIでみたように、達成や発見は換喩の論理に従う。ポランニーによれば、学習もまた小さな発見であって、したがってこれもまた換喩の論理に従うだろう。確かに例えば、アルファベットや「歩く」や「犬」といった言葉は、意味を通して学ばれたのではないはずである。それらは、むしろ換喩的に学ばれたはずである。あるいは、「社会」や「原子」などの抽象的な言葉は、意味によって学ばれたようにも思われる。しかし、これらの言葉も、その本質的な部分は換喩的に理解されるように思われる。

こうして、隠喩／換喩と、教える／学ぶとの間には平行関係があるように思われる。つまり、教える表現は隠喩的であり、その表現の理解は換喩的な論理に従う。このことをヘレン・ケラーの事例によって見てみよう。

アン・サリバンは、ヘレンと出会った翌日、彼女に人形を贈り、「に-ん-ぎ-ょ-う」という綴りを教える。ヘレンは、この指の遊びがおもしろく、たくさんの言葉を綴ることを覚えている。ある日、ヘレンが新しい人形で遊んでいると、サリバンは、別の人形をヘレ

ンの膝の上において、「に-ん-ぎ-ょ-う」と綴りながら二つとも同じ名であることをヘレンに分からせようとする。あるいはサリバンは、“m-u-g”と“w-a-t-e-r”との違いをヘレンに教えようとする。しかしヘレンは、この試みの繰り返しに痼癢を起し、人形を床に叩きつけるのである。(ケラー、1966：29-30)

この試みの失敗の原因は、サリバンが二つの人形の類似性を教えようとしているところにあるように思われる。類似性が成立するのは、表示的意味の成立した世界においてであり、メタ言語や隠喩は、表示的意味の間に成り立つ類似性に基づくものである。しかしヘレンは、いまだ表示的意味＝言葉の世界に生きてはいない。したがって、類似性の論理すなわち隠喩の論理によって彼女を教えることはできないのである。

ヘレンにとって、表示的意味の世界への参入のきっかけとなったのは、つまり、“w-a-t-e-r”という綴りがもの名であることを知るきっかけとなったのは、井戸の「水の冷たさ」、すなわち「水」と事実的関係にある「冷たさ」であった。あるいは、つい先程まで繰り返された「綴りの経験」と隣接関係にある「水の体験」であった。ヘレンはこの魂の目覚めの感覚を、「何かしら忘れていたものを思い出すような、あるいはよみがえってこようとする思想のおののき」(ケラー、同書：31)と表現している。ここに認められるのは、隣接性の原理すなわち換喩の論理であろう。

ヘレンの魂の二度目の目覚めは、抽象的観念の名を知ることであった。そして、ここでも換喩の論理が働いているのが見てとれる。まず、ヘレンは「愛」とは何かということを知り、サリバンに質問するが、そのころ、ヘレンは自分が手で触れて見ぬかぎり、何物も理解することができなかったため、「先生が『愛』を示すことのできないのがふしぎ」でならなかった(ケラー、同書：37)。

初めてヘレンが、抽象的観念というものを知ったのは、彼女が糸に通したビーズの間違いを正そうと必死に考えているときであった。このときサリバンがヘレンの額に手を当てながら「考える」と指話したことによって、ヘレンは抽象的観念というものを悟ったのである(ケラー、同書：38)。ここでは、サリバンは、人形という言葉を使ったときは異なり、換喩の論理へと歩み寄っているように思われる。

さらにサリバンは、愛について説明している。それは、「愛とは、今、太陽が出る前まで、空にあった雲のようなものですよ」、という直喩を用いた説明であった。しかし、この説明を理解できないヘレンを見て、サリバンは次のようなより簡単な言葉で説明しなおしている。「あなたは手で雲に触れることはできませんが、雨には触れることができます。

そして花や乾いた土地が暑い一日のあとで、どんなに雨を喜ぶかを知っています。あなたは愛には触れることができませんが、それがあらゆる物に注ぎかける優しさを感じることが出来ます」。この説明によって、ヘレンは愛を理解するのである。(ケラー、同書：38-39)

サリバンの説明は、説明というよりはむしろ物語だといえる。子供は抽象的な理論が理解できなくとも、物語は理解できる。中田基昭は、「お話」を聞き、それに魅せられているとき、我々は出来事を認識しているのではなく、お話の世界に住み込むという仕方、その世界を生きる、という(中田、1996：170-172)。つまり、お話は抽象的な理論のように理解されるのではない。むしろ、物語は抽象的理論を換喩的に書き替えたものだといえるかもしれない。なぜなら、抽象的理論が表示的意味によって構築されているのに対して、物語は因果的な繋がりによって表現されるものだからである。

以上のように、教えることが隠喩的であり、学ぶことが換喩的であるとすれば、教えることと学ぶことを繋ぐためには、隠喩的な教える表現は換喩的表現へ書き替え得るものでなければならない。ここで当然、あらゆる隠喩が換喩に書き替えられるのか、つまり、あらゆる類似性が実際に隣接性へ書き替えられるのか、という疑問が生じるだろう。しかし、むしろ逆に、教える表現が効果をもつには、この書き替えの可能性がなければならない、というべきであろう。この条件を満たさない隠喩は、魚の興味を惹かない擬似餌のようなものではないだろうか。ここに教える者が用いる表現の巧拙というものがあるであろう。

#### ◆註

(1) バルトも、ヤコブソンのこの見解に同意する。すなわち、「分析者はメトニミーよりもメタフォールを論ずることのほうに多くの武器を持っているのだ、ということを知覚しておきたい。これは、分析を行なうのに使う高次言語自体がメタフォール型であり、したがって分析対象のメタフォールと等質のものだからである。たしかにメタフォールに関しては豊富な文献があるが、メトニミーに関しては無きに等しい」(バルト、1971：160)。

(2) “integrate”という語は *Personal Knowledge* (1958年初版) では使用されず、‘Knowing and Being’ (1961) 以降の論文で使用される。*Personal Knowledge* では、“comprehension”がこの概念に相当する。また、“comprehensive entity”という語も *Personal Knowledge* では稀にしか使用されず (Polanyi, 1974: 64 参照)、*The Study of Man* (1959) をはじめ 1961 年以降の論文で使用される。*Personal Knowledge* では、“coherent entity” (Polanyi, 1974: vii 参照) や“a whole”などがこの概念に相当する。

(3) 例えばモリスは、「概念 (concept)」を意味論的規則とみなし得ることを示唆している (Morris, 1938: 24)。ここで、「概念」は、指示対象すなわち外延を意味していない。ここからも意味論的規則を「内包」と見なし得ることが分かる。

(4) ただし、その統辞法が実際に詳記可能か否かということは、今は問題ではない。この種の詳記不能性については、Polanyi, 1962. p. 50-52.を参照。

(5) モリスは、「いかなる規則も現実で使用されるとき行動の或るタイプとして作動し、こういう意味ですべての規則の中に語用論的成分がある」(Morris, 1938: 35) という。したがって、構文論的規則の実際の使用は必然的に語用論の次元を伴うことになる。

また、存在的意味が構文論と語用論の次元に生じる意味であるために、「脈絡」とは構文論と語用論の要素をともに含むものとなる。ただし、モリスが、「語用論における独特の要素は、……構文論や意味論の中で定義できないような用語の中に見い出される」(Morris, *ibid.*: 33-34) というように、すべての脈絡が構文論に還元できるのではない。このような「脈絡」の語用論的要素を特に区別する必要がある場合、本稿では、「文脈」の語を用いてこれを示すことにする。

(6) ポランニーにおける“denotative (表示的)”の語は、モリスにおける“designate (指示)”と“denote (現示)”を、一括して表現していると考えられる。「表示的」が、「現示」のみを表しているのではないことに注意されたい。

(7) 精神盲の患者シュナイダーはまた、自分の鼻を「掴むこと」はできるが、それを「指差すこと」はできない (メルロ＝ポンティ、1974: 179)。つまり、把握／指示と、具体的行動／抽象的行動には、パラレルな関係がある。指示の存在が意味論的次元の存在の一つの条件であるとするれば、この平行性は、身体運動の領域では抽象的行動が意味論的次元の存在の条件であることを示唆しているように思われる。

(8) 以下では、文脈から切り離された単なる命題を「文」と呼び、文脈のなかの命題を「表現」と呼ぶことにする。

(9) 確かに、ある表現と文脈との無関係さが確認されただけでは、それがア・プリオリに偽だと思われる可能性もあるために、それが隠喩であると断言できない。それゆえ、さらに、「所与の文脈と無関係な表現のうち、どのようなものが隠喩となるのか」と問う必要がある。そして、恐らくその答えは、「所与の文脈とは異なる別の文脈のなかで意味をもつ表現が隠喩となる」というものになる。例えば、「あの男は vulpes vulupes だ」という表現が隠喩と見なされないのは、「vulpes vulupes」が示唆する別の文脈は生物分類のそれ以外にはなく、その文脈の中では、この表現が有意味ではないからだと言える。

(10) 数学も意味論の次元を欠いているから、ここでも隠喩が不可能である。例えば、証明の過程に証明とは無関係な一行が現われたとしても、これが隠喩と理解されることはない。それは、数式が単に表出的な意味しかもたず、その結果、証明とは無関係な式も証明の脈絡内で解釈される他ないからである。

(11) この種の換喩的構成を菅野は特に「徴候 (symptom)」と呼ぶが、本稿では、これも単に「換喩」と呼ぶことにする。

(12) ポラニーは次のようにも言っている。「独創性の最高の形式は、……、最低次の生物学的パフォーマンスに遙かに近縁なもの」であり、「創造的行為自体は非形式的な括握的な力によって——天才が総ての子供と共有し、子供の方でもこの点では動物と近い勝負の能力によって——遂行される」(Polanyi, 1974: 400)。

(13) 野村雅一は、「動作や姿勢は、それ自体を越えて、なにかほかのものの「指標」として、換喩的な表意作用をおこなう」(野村、1983: 32) ことを指摘する。例えば、「パジャマを着るといふ動作も、習慣化した一定の就寝時刻と、寝室や寝具という場面をいわば換喩的に指向する以外には意味をもつわけではない」(野村、同書: 31)。

(14) ソシュールによれば、「統合法事実はすべて統辞論に類別されるわけではないが、統辞法事実はことごとく統合論に入る」(ソシュール、1972: 190)。つまり、統辞論すなわち構文論は統合関係の一部である。

(15) 下程勇吉は、ヘリゲルの記している『それ』という言葉、ヘリゲルの哲学的立場である新カント派の哲学に寄せて解釈している。すなわち下程によれば、『それ』という「非人称判断の主語」は「あらゆる述語的限定を生み成す母体」であり、「一切を遍く包む實在全体としての『根本現象』」である(下程勇吉「本書の出版に際して」、デュルクハイム、1990: X)。しかし、阿波はヘリゲルの哲学的な思弁に傾く態度を諫めており(ヘリゲル、1951: 87 参照)、ヘリゲルがその阿波の言葉を新カント派の立場から解釈したと考える積極的な理由はないように思われる。

(16) これに対して、表示の意味を持つ特殊な動作には等価な言語表現を見つけることができる。例えば、お辞儀の動作に等価な言語表現として、「こんにちわ」等。

(17) グッドマンのいう「指示の同一」を、「指示対象(外延)の同一」と解すべきではないであろう。例えば、「アメリカの女性大統領」と「コンピュータのプログラムを書く犬」とは同じ空集合を指示対象としてもつが、二つの表現は互いの言い替えではない。なぜなら両者は、指示の仕方(内包)が異なるからである。それゆえ、「指示の同一」は「指示の仕方(内包)の同一」と解すべきである。

(18) あるいは次のようにtを説明することもできる。つまり、「横棒を書き、それに直交するように縦線を書いて、最後に右に曲線を描くようにはねる」と言えばよい。もちろん、この説明は不十分であろうが、好きなだけ厳密に述べ直すことができよう。そして文字の場合、書き方自体は重要な意味をもたないために、文字を分解して言語化することは許容される。同じように、運動を分解して、それを言葉で説明することもできる。例えば、「弓を引き絞り、次いで、矢をもつ指をそっと開く」という具合にである。しかし、指を〈開く〉動作が「開く」を意味するのではない以上、この表現は、運動の手続きを述べているだけであり。運動の意味を述べているのではない。さらにまた、運動は、その脈絡それ自体が重要な意味(存在の意味)をもっているた

めに、それを分解して言語化することも許容できない。このような説明は統合を破壊し、その結果、脈絡の存在的意味は失われてしまうことになる (Polanyi, 1974: 50-52 参照)。

(19) この表現を、レイコフは換喩の一例として挙げている (レイコフ, 1993 : 91)。

#### ✦文献表

- バルト (Barthes, R.), 1971, 渡辺淳・沢村昂一訳『零度のエクリチュール』みすず書房。
- デュルクハイム (Dürckheim, K., G.), 1990, 落合亮一ほか訳『肚：人間の重心』広池学園出版部。
- エディ (Edie, J., M.), 1980, 滝浦静雄訳『ことばと意味』岩波書店 (1976, *Speaking and Meaning*, Indiana University Press)。
- グッドマン (Goodman, N.), 1987, 菅野盾樹・中村雅之訳『世界制作の方法』みすず書房 (1978, *Ways of Worldmaking*, Hackett Publishing Company, Inc.)。
- Gelwick, R., 1977, *The way of Discovery: An Introduction to the Thought of Michael Polanyi*, Oxford University Press, Inc.. (長尾史郎訳『マイケル・ポラニーの世界』多賀出版, 1982)。
- Herrigel, E., 1951, *Zen in der Kunst des Bogenshiessens*, Otto Wihelm Barth Verlag. (稲富栄次郎・上田武訳『弓と禅』福村出版)。
- ヘリゲル (Herrigel, E.), 1982, 柴田治三郎訳『日本の弓術』岩波書店。  
1991, 榎木真吉訳『禅の道』講談社。
- 生田久美子, 1987, 『「わざ」から知る』東京大学出版会。
- ヤーコブソン (Jakobson, R.), 1973, 川本茂雄他訳『一般言語学』みすず書房 (1970, *Essais de linguistique générale*, Seuil)。
- ケラー (Keller, H.), 1966, 岩橋武夫訳『わたしの生涯』角川書店 (1902, *The Story of My Life*, Doubleday and Company)。
- レイコフ (Lakoff, G.), 1993, 池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論』紀伊國屋書店 (1987, *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press.)
- メルロ＝ポンティ (Merleau-Ponty, M.), 1974, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学』みすず書房 (1945, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard)。
- Morris, Ch. W., 1938, *Foundation of the Signs*, "Foundation of the Unity of Science, vol. 1", University of Chicago Press. (内田種臣・小林昭世訳『記号理論の基礎』勁草書房, 1988)。
- 中田基昭, 1996, 『教育の現象学』川島書店。
- 野村雅一, 1983, 『しぐさの世界』日本放送出版協会。
- Polanyi, M., 1951, *The Logic of Liberty*, Routledge and Kegan Paul. (長尾史郎訳『自由の論理』ハーベスト社, 1988)。  
1958, *The Study of Man*, The University of Chicago Press. (邦訳は二つある。中山潔訳『人

- 間について』ハーベスト社, 1986. 沢田允夫・立山善康・吉田謙二訳『人間の研究』晃洋書房, 1986).
- 1960-61, 'Science: Academic and Industrial', *Journal of The Justitude of Metals*, vol. 89. (慶伊富長編訳『創造的想像力』ハーベスト社, 1986 に所収).
- 1963, 'The Potential Theory of Adsorption, The authority in science has its uses and its danger', *Science*, vol. 141. (慶伊富長編訳『創造的想像力』ハーベスト社, 1986 に所収).
- 1964, *Science, Faith and Society*, The University of Chicago Press. (初版は University of Durham より 1946 年出版. 中桐大有・有田謙二訳『科学・信念・社会』晃洋書房, 1989).
- 1966a, *The Tacit Dimension*, Doubleday. (佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊國屋書店, 1980).
- 1966b, 'The Creative Imagination', *Chemistry and Engineering News*, April 25. (慶伊富長編訳『創造的想像力』ハーベスト社, 1986 に所収).
- 1969, Marjorie Grene ed., *Knowing and Being*, The University of Chicago Press. (佐野安仁・澤田允夫・吉田謙二監訳『知と存在』晃洋書房, 1985).
- 1974, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, The University of Chicago Press. (初版は, Routledge and Kagan Paul および Chicago University Press より 1958 年に出版) (長尾史郎訳『個人的知識 — 脱批判哲学をめざして』ハーベスト社, 1985).
- Polanyi, M. and Prosch, H., 1975, *Meaning*, The University of Chicago Press.
- 櫻井保之助, 1981, 『阿波研造 — 大いなる射の道の教』阿波研造先生生誕百年祭実行委員会.
- 佐藤信夫, 1992, 『レトリック感覚』講談社.
- 菅野盾樹, 1985, 『メタファーの記号論』勁草書房.
- 1995, 『いのちの遠近法』新曜社.
- ソシュール (Saussure, F.), 1972, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店.
- 山中桂一, 1994, 『意味の修辞学』(池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論』講談社).
- (邦訳のある文献については、訳書を参照させていただいたが、引用は必ずしも邦訳どおりではないことをお断りしておく)